

搔落しによる渦文、外面に草葉文風の文様を施文する。69は口縁部内面に工字文、外面に三宝珠様の文様と三つ星を施文し、見込にも何らかの文様が一部分のみ残る。鮮やかなコバルトを呈する。68の釉面には貫入が入る。70も酒杯と思われるが小皿の可能性もある。口縁部内面には帯を描き、搔き取って列点鋸歯文を表わす。外面は帯状区画の中に松・竹・梅を描く。71は瀬戸の蓋。轆轤成形で、身の合せ部を除く全体に灰色の釉がかかる。合せ部には紅色顔料が付着する。72は瓶。内外面ともに轆轤目が顕著に残り、頸部内面から外面全体にかけて灰白色釉がかかる。胴部に呉須で文字が書かれているが大きく欠損し、判読できなかった。

瓦（第4図73～第5図75）

73は棟込瓦。瓦当面は金雲母を散らした型で八弁の菊花文をおこす。二次火を受けており、黄灰色を呈する。74は鬼瓦の獅子口である。胴部に「へ」字の綾筋が二条あり、上部には経の巻がのっていたようで、剥離痕と撫で痕が残る。下端は直線的で、裏面には竜頭の痕が残る。篋による撫で或いは磨きがかかる。75は丸瓦。凸面は長軸方向の削りを施こし、凹面には、型にかぶせた袋の撚紐痕が明瞭に残る。尻部寄りに目釘穴が一箇穿たれている。その他の部分も削りを施こしている。

その他

銅銭。直径二・五センチ、中央孔〇・六センチ四方、周縁部厚〇・一八センチを測る。緑青で覆われ、銘は全く分らない。

（竹村 哲也、遠池 良逸、佐藤 利秀）

三嶋藍野陵整備工事区域の立会調査

継体天皇の三嶋藍野陵における外堤内法護岸工事第二年度分の掘削工（第6図の45～69区^(注)）に、昭和六十二年十月二日から十二月二十六日まで立会った。調査の結果、掘削範囲から多数の遺物が出土したが、原初の遺構は認められなかったため、当初設計のとおりに施工した。

掘削地の地層は、事前調査における基本的な層序と同じく、上から表土層・堆積層・富田礫層で、堆積層の下部には原初の可能性のある地層が認められるところもあった。

遺物は、大部分が堆積層に包含されており、第6図52・65～69区を除く各区から出土し、特に48・49・59～61区からは、出土品の数も多い。採集した出土品は、埴輪九六三片、土師器一五片、瓦四片、須恵器三片など計九九六片である。

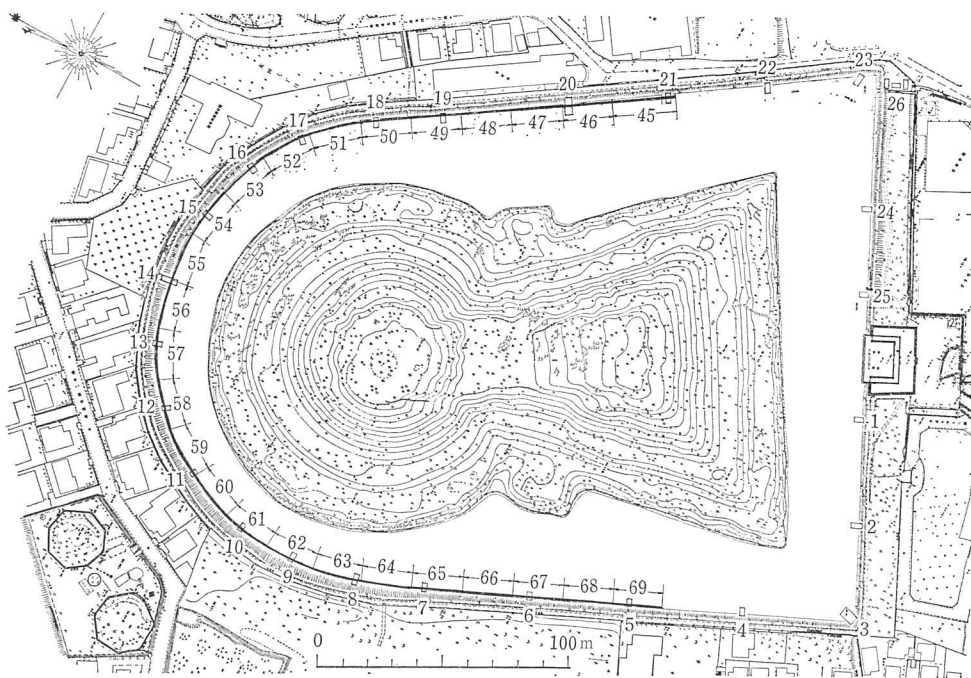
土師器（第7図1）

1は、まっすぐな肩から、少し外反気味の直口縁がつく甕。調整不詳。

炆器（第7図2）

2は、底部にまで至る卸目を一本づつ刻んだ摺鉢で、外面腰部に斜の撫痕を残す。

須恵器（第7図3～5）



第6図 継体天皇陵立会調査箇所的位置 (1/3000) (1～26は昭和61年度事前調査のトレンチ番号)

3は、巻上げ、水引き成形の坏蓋で、口縁部が外に小さく開き、端部は断面三角形。鈍い稜の上に丸い天井部がのり、その上半部外面は回転篋削り。4は、長頸壺の破片で、胴部はまるく、外面を回転篋削り、一条の沈線を介してまる味の少ない肩部に至る。5は、甕の肩部もしくは底部の破片で、内面に同心円状の叩目、外面に平行叩目のうえに掻目を施す。

埴輪円筒(第7図6、第8図18)

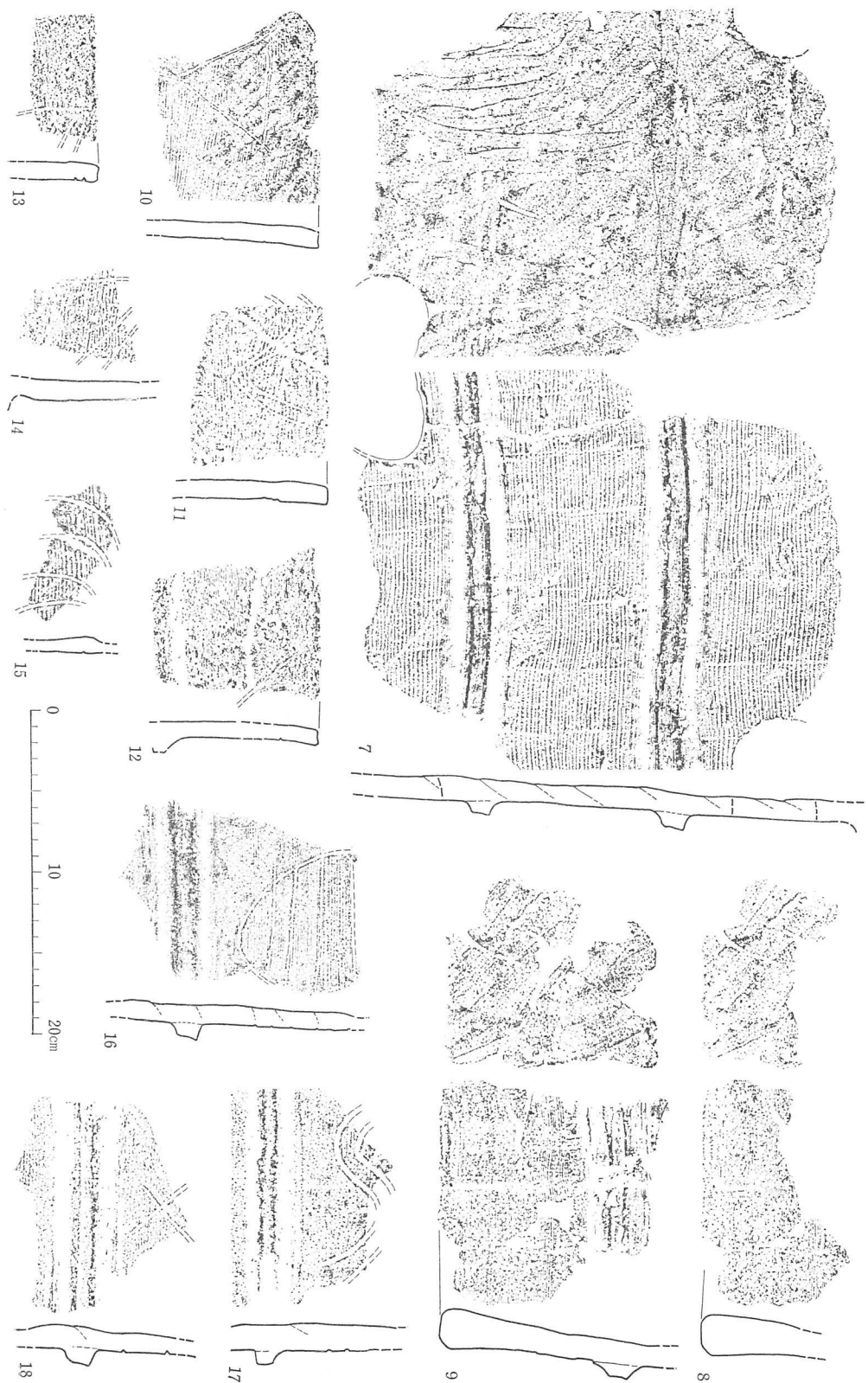
出土品の大部分を占め、須恵質のものはほとんどない。何段階かに分けて粘土紐を積上げ、成形と調整を施す。外面の調整は、指頭による斜撫でつけ、縦刷毛目、断続的な横刷毛目の順に施すのを基本とするが、縦刷毛目が省略されたり、数次にわたって横刷毛目が施こされることがある。内面の調整は、指頭による斜撫でつけが多く、そのうえに斜刷毛目さらに突帯付近は横撫で、口縁部付近は横刷毛目に加えられる。突帯は、縦または一次の横方向の刷毛目のうえに粘土紐を貼付け、調整の最後に横撫でで仕上げる。透孔は、不整円形のものである。一部の埴輪には、波状文その他の線刻が、第8図10、18のとおり見られる。施文の部位は、口縁部のほかは不詳。以上のように、埴輪円筒は、事前調査時の出土品(本誌前号)と異ならない。

朝顔形埴輪(第9図19)

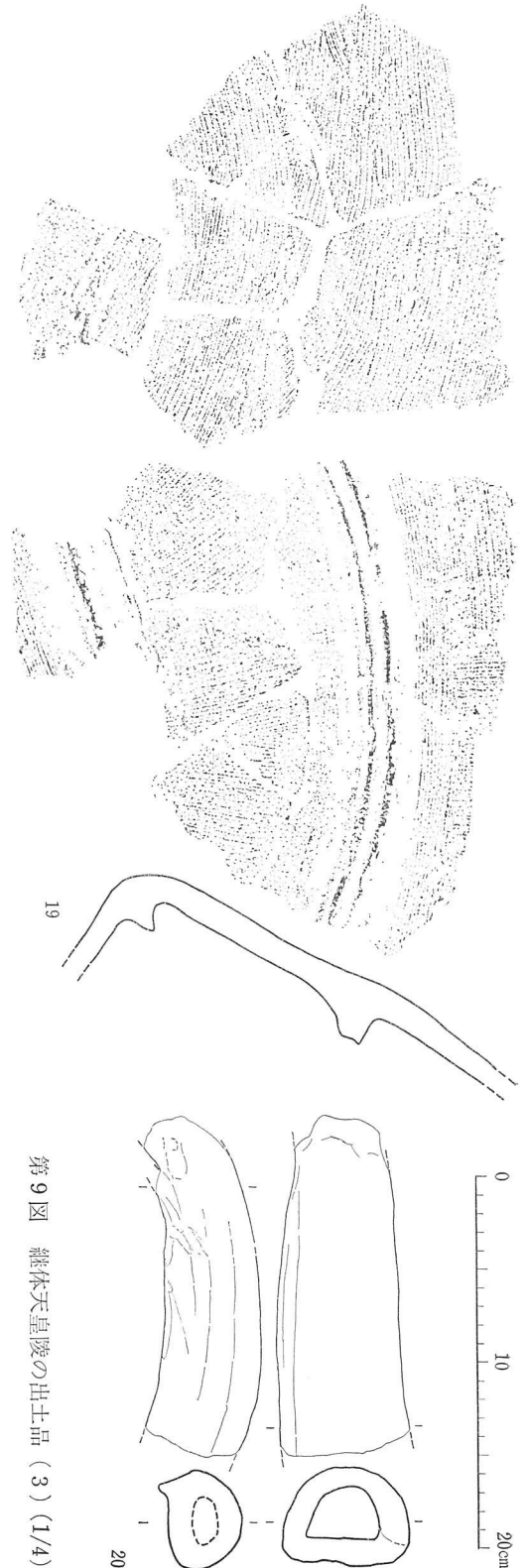
19は、朝顔形埴輪の肩部から口縁部の接合片。花部は、直線的に外に開き、外面に縦刷毛目、口縁部ではその上に横刷毛目を加え、内面に横



第7図 継体天皇陵の出土品(1) (1/4)



第8図 継体天皇陵の出土品② (1/1)



第9図 継体天皇陵の出土品(3)(1/4)

(78)

に近い斜刷毛目を施す。肩部は、まるく、外面に横刷毛目、内面に撫でつけを施す。

形象埴輪(第9図20)

20は、人物埴輪の下腕から手先の部分と疑われる埴輪片。中空で角状を呈する。

注 第6図の調査区を示す45・46・69は、本誌前号五九頁第1図の45・46・27と重複するが、当該地区の掘削施工は昭和六十二年度。

(笠野 毅)

大市墓の墳丘調査

当部では陵墓の墳丘調査を随時行っており、今年度は段築数や墳頂部の状況等をめぐって論争のある大市墓について実施した。この墳丘調査については、日本考古学協会を始めとする十二学会の要望により、その成果を公表することとなった。

調査は、昭和六十三年二月二十一・二十二の両日にわたって墳丘の外形調査を行った。以下はその知見である(第10図)。